報告 592

児童相互のつながりを大切にした学級集団づくり(2 年次)

－「学級わくわく大作戦」を通して－

中澤　慶子（京都市総合教育センター研究課　研究員）

社会構造や雇用環境が大きくまた急速に変化している予測困難な時代になってきている中で，平成 30 年度京都市学校教育の重点において「子どもが未来を創り上げていくために必要な資質」として「主体性」や「社会性」が挙げられている。これらの資質・能力を育み，児童が力強く生きていく基盤をつくる場として，児童にとって身近な学級集団が重要であると考える。本研究では，児童が相互につながり合う学級集団づくりの過程で，このような資質・能力を育んでいくことを目指し，実践を行った。

第１章　児童相互のつながりを大切にした学級集団づくり

第１節　１年次の研究の成果と課題

１年次の研究では，学級目標達成に向けた課題解決に取り組む過程で，児童に「主体性」や「社会性」が育まれていくと考え，学級の課題を話合う話合い活動を行い，その後，集会活動や係活動で決めたことを実践した。活動の中で，児童がそれぞれの思いを伝え合い，納得のいくまで話し合う経験をすることで，相互理解が深まり，相手の気持ちを考えて行動する姿が見られるようになった。課題としては，学級活動と教科等を関連付け，限られた時間をより効率的かつ効果的に使うことが挙げられる。

第２節　学級目標や学級活動に関する調査から

本市採用 5 年目教員を対象として，学級目標や話合い活動に関する意識調査を行った。この調査から，学級目標の設定の在り方や形骸化しないような手立てを整理し提案していくこと，話合い活動に取り組みその有用性を検証していくことの必要性を感じた。

第３節　2年次の研究に向けて

図1は，本研究の研究構想図である。１年次の実践における成果や課題を踏まえ，学級活動を中心とした学級集団づくりにおいて，児童のやる気を引き出す３つの視点を意識しながら関わることで，児童が相互につながる学級集団へと高まり，主体性や社会性が育まれると仮説を立てた。本研究の取組を「学級わくわく大作戦」と名付け，学級目標実現に向けた学級集団づくりへのアプローチの仕方の１つとして提案していく。

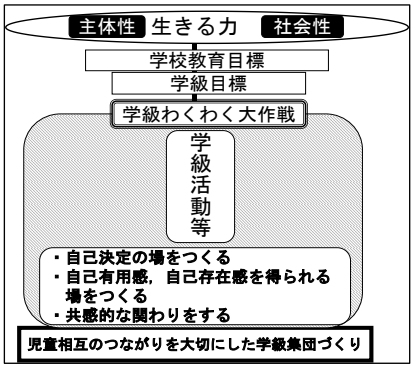

図１　研究構想図

第２章　「学級わくわく大作戦」の取組

第１節　児童のやる気を引き出す３つの視点について

（１）自己決定の場をつくる

児童に自由に決定をできる機会を作ることはやる気の向上につながると考え，自分で意思決定を行う場や，みんなで決める合意形成の場を意図的に作る。自己決定の機会は，決めたことに対して責任を持つことや，他の人のことも考える大切さを児童に学ばせていく機会となると考える。このような場をつくるためには，児童の実態を把握し，どのような場面で児童の自己決定を促すことが有効かをあらかじめ計画しておくことが必要だと考える。

（２）自己存在感，自己有用感を感じられる場をつくる

学級で自分が必要とされ，存在価値があると感じることが児童のやる気の向上につながり，そのような場を意図的に設定することが自己存在感や自己有用感の高まりにつながると考える。「がんばったことみつけ」などを活動の中に入れていくことや，集会活動の内容自体にそれぞれの個性を生かすことができる工夫等を取り入れていく。

（３）共感的な関わりをする

児童が喜びや居心地のよさを感じるような教員と児童との触れ合いを行うことで，児童のやる気につながるだけではなく，児童同士にも共感的な人間関係が育まれ，学級全体に親和的な雰囲気が醸成されると考える。教員が児童の活動に対し，自分事のように喜ぶ姿や何がよいと思ったのか具体的な賞賛をするなど，関わり方の工夫が児童の共感につながると考える。

第２節　「学級わくわく大作戦」の指導の流れ

「学級わくわく大作戦」は以下のような指導の流れで実践していく。

① 児童の活動前
・児童アンケート等を用いた児童の実態把握
・目標設定・計画
② 児童の活動中
・3つの視点を意識した関わり
③ 児童の活動後
・その後の集団づくりに生かす振返り

第３章　実践について

第１節　児童の活動前

本研究は，A校5年生とB校4年生を対象に実践を行った。児童の学級に対するアンケート等を用い，実態を把握した。各校の実態に応じて目標を設定し，学級活動を中心とした計画を立てた。実態把握の際に，個々の児童にどのような活躍の場を設定することが有効かを想定し計画を行った。それにより，児童の意思決定を促す声かけが可能になり，活躍の場が広がった。

第２節　児童の活動中

児童は，集会活動に向けた話合い活動，決めた内容の実践を行った。活動の始めに，個人のめあてを設定し，毎時の活動の終わりに振返りシートを活用した。それを学級全体で集計し，グラフに表した。可視化することで，個々のがんばりが学級全体の目標の実現につながることを意識できるようになり，自分のめあての達成に向けてやる気をもって活動する姿が見られた。話合い活動では，児童による進行を可能にし，合意形成できるように司会進行シートを利用した。その中は，意見の対立があったが，折り合いをつけながら話合い，まとめることができた。また，児童が見通しをもって活動できるように予定を掲示したことで，児童が声をかけあい，進んで準備をする姿が見られた。集会活動の内容にも，個性が生き，友達のよさを認め合える工夫を行ったので，互いの活躍を認め合う姿が見られた。集会活動後の振返りでは，友達のがんばりをカードに書いて交換し合う活動を行った。児童の記述から，自分では気付かなかった自分のがんばりに気付く児童がいることが分かった。

第３節　児童の活動後

図２は，活動前後に行った学級アンケートの結果である。このような客観的な資料を活用して児童の変容を見取り，その後の集団づくりに生かしていくことが重要だと考える。

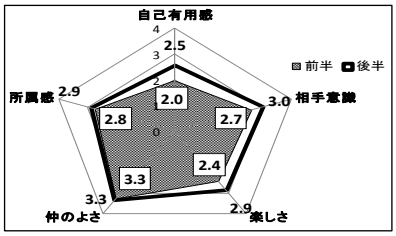

図２　学級アンケート

第４章　研究の成果と課題

第１節　３つの視点を取り入れることを通して

3 つの視点を教員が意識しながら取り組むことで，活動すべてが学級集団づくりという同じ目的でつながった。それは，学級活動における活動だけではなく，全ての教科等でも同様である。とりわけ教員が集団づくりという視点を持ち指導することでよりつながりが広がると感じた。特に道徳科や総合的な学習の時間は集団づくりに関わる部分が大きいので，これらをうまく活用していくことでより効果が上がると考える。

3 つの視点はどれも大切だが，特に児童が自己決定して活動することが児童のやる気につながったと感じた。そのような場を増やすことでより自治的な活動となり，それが児童同士のつながりを強めることになると考える。しかし，児童の選択の自由を増やしていくということは大切であるが，教員は常に児童の様子を予測して計画し指導していくことがより重要であることは言うまでもない。そこで，普段より児童の様子を書きとめていったり，学級アンケートのような客観的な見取りを定期的に行ったりしながら細やかに児童理解をしていくことが大切であると感じた。

第２節　「学級わくわく大作戦」を通して

集会活動の後，児童に「集会活動は成功したと思うか」について調査を行うと，両校とも全ての児童が肯定的な回答だった。その理由として半数以上の児童が「みんな」という言葉を用いており，「協力」「楽しむ」「笑顔」につなげていた。みんなで協力することやみんなが楽しむことが成功に繋がったと捉えていることが分かる。それは，自分だけでなく，みんなが楽しむ方法を考え活動を取り組むようになったためである。活動後には次はこんな活動がしたいといった次への意欲につながっていた。このように，児童の実態を把握し，視点を明確にしながら集団づくりを行うことで学級目標実現につながり，児童の主体性や社会性を育むことにもつながると考える。